

朝の30分に思うこと

今年も毎朝門に立って「おはよう」をしています。25年間やってきました。初めて幼稚園に来たとき、「園長先生はこれをしてください。」と命じられました。それ以来、朝幼稚園にいられない日を除いて、毎日欠かさずこれをしてきました。毎日30分の「おはよう」を通して、とてもたくさんのお話を教えてもらいました。25年前にこれを命じられたことを、心からありがたいことだったと思っています。

朝の30分は、私が子どもの幼稚園生活の1年間を感じ取る場です。4月は幼稚園から出て行く子がいて、その防波堤になります。まだ幼稚園が「自分の場」になっていないのです。5月になるとばら組の男の子たちが群れて来て、からかってくれます。やっぱり居場所探しをしているのです。6月になって雨が多くなるころには、次第に子どもたちは門から遠ざかっていきます。雨だからでなく、色々な人やことに出会った子どもたちが、相手を見つけ、楽しさを見つけるからです。7月になればたんぼ組の子たちまでが「園長カイジユウ」と呼んで通っていくようになります。小さなたんぼも幼稚園の仲間になったという証拠です。

やがて年度も後半になると、子どもたちが「おはよう」もそこそこに通り過ぎて行きます。その目はもう園舎の中を向いています。今日やる楽しいことが、子どもたちの心をそれ一色にしているからなのです。「おはよう」を言えるようになってくれるのもうれしたことだけれど、それも忘れて幼稚園に駆け込む姿はもっとうれしいものです。その子の園生活の充実度や満足度の高さを表していると思うからです。

朝の30分は、子どもとお母さんの関係を学ぶ場でもあります。一番上のお子さんの手をしっかり握って、親子で緊張してやってくる時期があります。その子が次第にお母さんから手を離し、並んで歩く人になり、親子で競走してくるようになり、やがて「さきに行くネ」や「お母さんを置いてきちゃった」になります。これが1サイクルです。お母さんは子どもの自立への歩みを感じ取り、子どもと自分との関係の変化を味わいます。その味にはちょっぴりのさびしさもあります。「おかあさん！」と泣く声を背中で聞きながら帰った時期がありました。それがいつのまにか子どもに置いていかれる自分になっているのです。「おかあさん」を耳をふさぐ思いで振り切った心の痛さがなつかしく思われるのです。

2人目・3人目ともなれば、第1サイクルとは大きく変わります。お母さんはどっしり構えていて、「おかあさん」と泣いてくれれば「ちょっぴりうれしい！」などどさえるのです。上の子と同じであれば「おんなじよー！」、上の子と違っていけば「ぜんぜんちがうのよー！」です。月曜日に上履きを持ってくるのを忘れても、「幼稚園のを借りなさいよ」で済ませます。これなら2番目3番目の子が要領が良くなるのは当然のことだ、と思わされます。

こうしてみると、25年の朝のおはようから学んだことは、長い目で見るということの大切さだったようです。1年間待てば変わります。1年間で変わらないものは3年間待てば変わります。長い目で見るには、待てる必要があります。すぐに結果が出ないことを時間をかけて待つのです。必ずなるという保証のないようにみえることでも、いつかそうなってくれると信じて待つのです。世界で一番長く待ってあげられるのはお母さんです。願い、期待し、待っているお母さんがいるから、子どもは変われるのです。